

第3回

「調べる」場面でのひと工夫

1. 「知識は与えるものではなく獲得するもの」～「調べ学習」の極意とは

「アクティブ・ラーニング」や「主体的」という言葉が教育界を賑わす以前から、日々の授業で心がけていたことがあります。それは意地でも教師のほうから『教科書〇〇ページを開けてください』と発言しないこと、言い換えれば、「授業の第一声は教師ではなく子どもである」ということです。

これまでの第1回、第2回でも様々な事例を紹介しましたが、いずれもこの「授業の第一声は子どもから」ということを心がけて実践しています。そして、この信念に基づけば、社会科の授業で身につけるべき知識も、教師が子どもたちに与えるのではなく、「子どもたち自らが主体的に獲得していく」べきです。

知識基盤社会の時代を、グローバル化した変化の激しい社会を、今、目の前にいる子どもたちは生き抜いていくわけですから、子どもたちが主体的に知識を獲得していく技能を育むことの重要性は言うまでもありません。

そこで、今回は、「知識を獲得するための技能」（調べる技能）の習得・活用のポイント、そしてその根底に流れる「調べ学習」の極意について、具体的な一単元（4年生で最初に学習する「第一単元」である『水はどこから』；4～6月に実施、13時間扱い）の流れに沿って説明していきたいと思えます。

「調べ学習」の極意

○子どもたちとともに学習問題をつくり、問題解決の過程で「知識を獲得する技能」（調べる技能）を習得・活用させていくこと。

→調べる必然性をもつことで、「知識を獲得する技能」（調べる技能）のよさを実感し、より確かな技能として習得・活用していく。

○子どもたちが調べた事実を、「子どもの手柄」として授業の中で取り上げていくこと。

→「調べ学習」の楽しさを味わい、調べることを楽しむ「学びスト」になっていく。

2. 「知識を獲得する技能」（調べる技能）とは

■直接体験しながら調べる技能

- ①おたずね（インタビュー） ②見学 ③観察 ④実験

■「もの」を使って調べる技能

- ⑤教科書 ⑥資料集 ⑦地図帳 ⑧国語辞典 ⑨百科事典
⑩参考書・パンフレット，新聞・雑誌など ⑪インターネット

「知識を獲得する技能」（調べる技能）は大きく分けて二つあります。直接体験しながら調べる技能と、「もの」を使って調べる技能です。

直接体験しながら調べる技能には、①おたずね（インタビュー）、②見学、③観察、④実験の四つがあります。中学年では「問い」をもったら、「たずねる」活動（①）や「見る」活動（②・③・④）が中心になります。中学年ほどではありませんが、高学年でも大切な技能になります。自ら見学に行くようになったら、技能がワンランク上へ上がった証拠です。さらに、ていねいに観察するようになったり、実験して「見る」ようになったりすれば、確実に調べる技能を習得したことになります。

「もの」を使って調べる技能には、⑤教科書、⑥資料集（『わたしたちの東京』等の副読本も含む）、⑦地図帳、⑧国語辞典、⑨百科事典（例：ポプラ社 総合百科事典『ポプラディア』等）、⑩参考書籍・パンフレット、新聞・雑誌など、⑪インターネットの七つがあります。この七つの「もの」を、自由自在に使いこなして調べることができるようにします。教科書もその例外ではありません。教科書には本文以外にも様々な資料や学び方が載っています。子どもたち一人ひとりが主体的に「自分たちの問題」を追究していくために、これら七つの「もの」を活用していけたらと思います。

ただ、子どもたちが調べるための必然性（学習問題が成立していること）や、調べるためのさまざまな機会を、教師が意図的に仕掛け、子どもが動き出すのを待たなければ、調べる技能はなかなか習得されません。子どもたち一人ひとりが調べ方のよさを実感し、くり返し活用できるようにしていくことで、より確かな技能として習得されていくのです。

以下、4年生『水はどこから』（13時間）を通して、その過程を示していきます。

※【 】は学習技能，「 」は学習問題

実際に手洗いをして、蛇口の下にバケツに溜まった水を計る【④実験】

→「学校ではどれくらいの水を使うのだろう？」

水道メーター探しと事務室への「水道使用量及び料金」のおたずね

【②見学，①おたずね】→「いったい何にこれだけの水を使うのだろう？」

蛇口と便器の数を調べて、みんなで「学校水マップ」を作成する【②見学】

→「学校で一番水を使う所ってどこだろう？」

校内の水の通り道を知るために用務員のかたにポンプ室を案内してもらおう【②見学】

→「学校の蛇口の水はどこからくるのか？」

浄水場の先はどの川につながっているかを調べる【⑩パンフレット】

→「休みの日に川の水をとって観察してみよう！」

荒川や多摩川の水を採取して、その色やにおいを観察する【③観察】

→「こんなきたくない水がどうやって飲み水になるのだろう…」

浄水場の仕組みを調べ、手づくり浄水器を作成し実験する

【⑤教科書，⑥副読本，④実験】

水道局の出前授業で、さまざまな人たちが自分たちの飲み水にかかわっていることを知る。→「安全でおいしい水を支える人たち。一番大事な人は？」

本校の水道水を供給している小河内ダム場所を知り、その景観を想像する

【⑦地図帳】→「なぜ，ダムが小河内村につくられたのだろう？」

インターネットや図書資料で，ダム建設で湖底に沈んだ村があったことを知る

【⑪インターネット，⑩参考書籍】

また，古文書の難解な言葉の意味を調べる【⑧国語辞典，⑨百科事典】

→「小河内村の子どもたちはダム建設をどう思ったのか？」

教師が提供した資料やみんなが収集した資料をもとに，自分の意見を述べる。

→「自分が小河内村の住人だったらダム建設に賛成できるか？」

図書館で調べてきた資料を提示。

→「なぜ，小河内村の住人は全員賛成に回ったのか？」

話し合いの後，ダム建設により移転した当時小学生だったおばあさんのインタビューを教師が提示。→「これまで学んだことをまとめよう！」

3. 問題解決の過程で調べる技能を習得・活用させていく



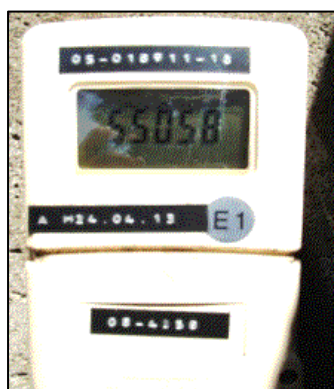
【資料1】クラス全員が手洗いで使った水を計量する

休み時間の終了間際，ある子が手洗いをした後，蛇口の下に設置していたバケツの中にたまっていった水の量は約2リットル。そのことを紹介すると，「クラス全員で実際に手洗いをして，使った水の量を計りたい！」という声が上がりました。そこで実際に計ってみると，クラス全員の手洗いで使われた水の量は（けっこう節水した子が多かったにもかかわらず）約70リットルでした（【資料1】）。

本校は 24 学級あるので、一回の手洗いで約 1,680 リットル、2 リットルサイズのペットボトルに置き換えると 840 本分の水が使われているという衝撃的な事実と出会いました。

ただ、学校では手洗いだけではなく、トイレや冷水器、給食室、プールなどにも水が使われています。そこから「学校ではどれくらいの水を使うのだろう？」という学習問題が成立し、問題を追究していくことになりました。

【資料 2】学校の水道メーターと各月の使用水量と金額



	使用量(m ³)	金額(円)
4月	546	378,657
5月	1,219	873,968
6月	1,513	1,106,215
7月	1,238	868,941
8月	913	639,465
9月	840	587,191
10月	650	451,132
11月	811	566,423
12月	504	348,581
1月	636	441,106
2月	844	590,055
3月	613	424,635
合計	10,327	7,291,399

「家に水道メーターがあるよ。学校にもないかな。朝それを見て、帰るときにまたそれを見れば、学校で1日に使う水の量がわかるかもしれない！」

「家で水道の使用量と料金が書かれた紙を見たよ。きっと学校にもあるはず。事務室に行ってみたら…」

このような発言を受けて、休み時間に学校内を探検したり、事務室におたずねに行ったりすることになりました。

もちろん、事前には見学の方法（何を見ればよいのか〔何がわかればよいのか〕、デジタルカメラの撮影方法、マナー等）や、おたずねの方法（質問者の選定、何を聞けばよいのか〔何がわかればよいのか〕の明確化、マナー等）を確認しました。このとき、実際にロールプレイなどをしてみると楽しく確認ができます。マナーとは、a：相手の都合を聞く（「今、お時間よろしいでしょうか」）、b：働いている人など他人に迷惑をかけない、c：お礼を言う（「ありがとうございました」）等です。

この見学とおたずねで、子どもたちは正門脇にあった水道メーターを発見し、事務室のかたから「(昨年度の)各月ごとの水道使用量及び料金」を示す資料をいただきました（【資料 2】）。

なんと本校の年間水道使用量は、1,032 万 7,000 リットルで、2 リットルサイズのペットボトルにすると 516 万 3,500 本分になり、総額は 729 万 1,399 円という衝撃的な事実と出会ったのです。

水でこんなにお金がかかるということを知った子どもたちからは、「いったい何にこれだけの水を使うのだろう？」という新たな学習問題が成立しました。

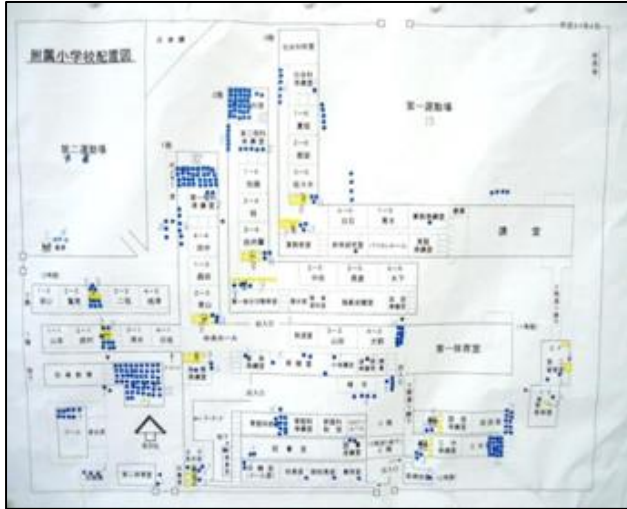
「給食室では料理だけでなく食器も洗うから、たくさんの水を使いそうだ」

「トイレで流す水の量は多そうだし、学校だから便器の数也多そうだ。調べてみよう」

「蛇口の数も多いよ。ふだんの手洗いや水飲み、そうじにも使うし…」

このような発言を受けて、『それならクラスで学校水マップをつくろう！』ということになり、学校中の蛇口と便器の数を調べることになりました。

自分の持ち場を決めて調べると「みんなで一つのマップをつくる」という達成感が味わえます。



【資料3】 学校内の蛇口や便器の数調べ

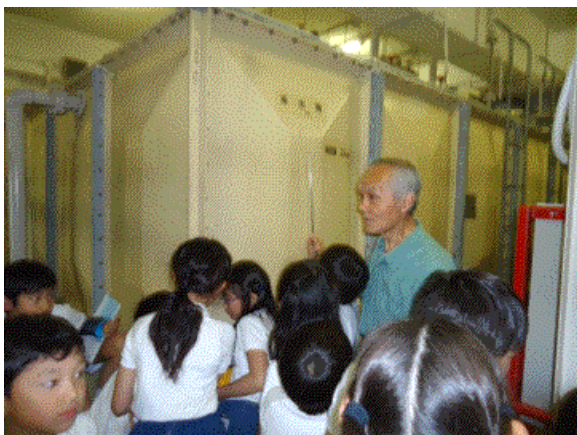
結果、96 個の便器と 295 個の蛇口が確認され、子どもたちの中で「学校で一番水を使う所ってどこだろう？」という学習問題が成立しました。

子どもたちの予想は、蛇口や便器の数を根拠に 52 個もの蛇口があった給食室、96 個の便器のあったトイレ、そしてプールでした（【資料3】）。

この問題を解決するために、子どもたちが活用したのが、意外にも教科書や副読本でした。教育出版の教科書『小学社会3・4下』p.60には、料理や食器洗い、ふろ、トイレ等の水の使用量を扱った「ひろきさんの家で1日に使われた水の量」(資料イ)が載っています。これを参考に、どこでどれくらいの水を使うかを予想したのです。「教科書を教えるのではなく、教科書で教える」ということは、このようなことを指すのかもしれませんが。

学校水マップづくりの調査中に用務員のかたに出会った子どもたちが「一番水を使うのは給食室だよ」と教えてもらいました。給食室と予想していた子どもたちは大喜びです（【資料4】）。しかし、ここで、おたずねの方法として大切なことを指導するチャンスが来ました。そうです。「ウラをとる」ということです。

子どもたちは、事務室や給食室に行って本当に給食室が一番多く水を使うのか、確かめることができました。さらに、給食室前には専用の水道メーターがあり、パイプが校舎の方へつながっていることを発見しました。学校水マップをつくるために蛇口等をつぶさに観察することを通して、水の通り道に目が向くようになったのです。そして、なんと調査中に会った用務員のかたに「秘密の部屋」に案内してもらえることになりました。「秘密の部屋」とは本校では地下にあるポンプ室のことです。ふだん入れない部屋を見学できるだけでなく、自分たちがまさにそのチャンスをつかんだということで子どもたちは大喜びです。



【資料4】 用務員の方から教わる子どもたち

実は、予想される子どもの動きとその時の対応を、事前に用務員のかたにお願いしておきました。発見は「子どもの手柄」にしたいですよ。調べるきっかけづくりも子どもたち自身の手でつくり出せると、より意欲的に問題を追究していくことになります。その結果、

調べる技能も習得・活用されていくのです。

用務員のかたは指示棒をもって、電気でポンプが回って学校中の蛇口の先まで水を送っていることや、貯水槽のタンクの水は正門の方からやってくることを解説してくれました。その事実にくれた子どもたちの中から、「学校の蛇口の水はどこからくるのか？」という学習問題が成立しました。ここで使われた資料が、東京都水道局のパンフレットでした。なぜなら、どこから水が来るのかについて、図として町ごとに細かい区割りで示されていたからです。

「学校の水は朝霞浄水場、さらにその先は利根川と荒川と多摩川につながっている」

「利根川と荒川と多摩川という三つの川のブレンド水なんだ！」

「昨日のニュースだと利根川の水は止まっているらしいから、今日は混ざってないかも…」

「本当に川の水飲んでいるの？ 近所の荒川
の水はけっこう汚いような…」

『休みの日に川の水をとって観察してみよう！』

こうした声を受けて、子どもたちは休日に荒川や多摩川の水を採取して、その水を色やにおいなどをじっくりと観察しました。色やにおいといった観察の視点もごく自然に出てきました（【資料5】）。

「こんな汚い水がどうやって飲み水になるの
だろう…」。

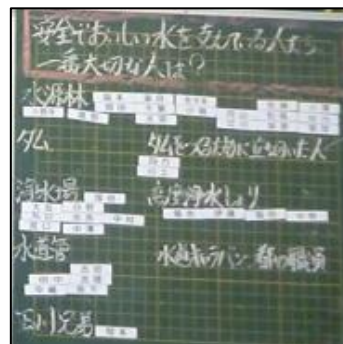
この観察がもとになって、教科書や資料集（副読本）、さらにパンフレットなどで浄水場の仕組みを調べたり、東京都水道局の出前授業で浄水場の仕組みについて実験を通して教えてもらったりしました。このような経験をもとに、手づくり浄水器を作成する子どもも現れました。

出前授業を通して、浄水場で働く人だけでなく、水源林で働く人、水源林ボランティアの人、ダムや貯水池や川で点検・調整する人、ダムを建設した人、ダム建設のために村を立ち退いた人、水道管を点検・調整したり工事したりする人、受水槽を掃除する人、用水路を開削した玉川兄弟など様々な人たちが自分たちの飲み水にかかわっていることを知りました。

そこから、「安全でおいしい水を支える人たち。一番大事な人は？」という学習問題が成立し、子どもたち一人ひとりが思い思いの方法で調べていきました（【資料6】）。

話し合いでは、調べたことを根拠にして自分の考えを広げ、

【資料5】採取した川の水とその観察



【資料6】安全でおいしい水を支える人々を調べる場面の板書

深めていきます。もちろん、この話し合いの結末は「どの仕事もみな大切」ということで落ち着きました。また、このような話し合いを通して、それぞれの仕事の内容だけでなく、働いている人の苦勞や工夫にも迫ることができました。

4. 地図帳で調べる技能を習得・活用させていくには

この授業の後、本校の日々の水道水を供給している小河内ダムと、そのダム建設のために村を立ち退いた人たちについて「なぜ、ダムが小河内村につくられたのだろう?」「小河内村の子どもたちはダム建設をどう思ったのか?」といった学習問題が成立し、追究していき



ました。

さて、小河内ダムの場所を調べるためには、副読本やパンフレットに載っていたとしても、やはり地図帳を使って調べさせたいものです。

地図帳で小河内ダムを見つけたら、「37ページの③丁目の②番地」というような方法で教室のみんなに伝えるようにします。これは、地図帳の「さくいん」の引き方に則っていますが、地図帳を使うときの大事な技能になります。

4年生の初めに地図帳が配布されますが、私はこのときに、「日本びっくり名産地」という授業を行っています。

帝国書院の地図帳には、「だるま、ひな人形、ブルドーザー、ピアノ、学生服、自動販売機、ゲーム機…」などの小さなイラストが日本の各地域に載っています。これを子どもたちが見つけ出し、そのイラストが描かれている①都道府県名、②地図帳のページと位置(「何丁目の何番地」という表現で)をノートに書き、発表し合うというものです。

珍しいものを見つけ出した子は、「それをみんなに伝えたい」とか、「もっともっとたくさん珍しいものを見つけたい」という意欲が芽生えます。そのような意欲に支えられ、子どもたちは日本中をすみからすみまで見つめていくうちに、都道府県の名前や位置、地図帳の構成などを理解し、地図帳を使うための学習技能を楽しく身につけていくのです。



ある子どもが「神楽面」というものを見つけました。これは「宮崎県、20ページの④丁目の②番地」、高千穂という場所に描かれています。「神楽面の名産地、高千穂…。「なぜ、宮崎県高千穂は神楽面の名産地なのだろう?」という子どもたちの「問い」もわき上がってきました。

地図帳で場所を確認したとき、やるべきことが実はも

う一つあります。それは、「どんな場所だろう?」と問いかけ、地図帳をじっくりと読図させ、その場所の景観を想像させるということです。小河内ダムだったら、「標高が高い山地にある」「周りに家が少ない」「自然豊かな所」などといったことが見えてきます。そして、子どもたちに10秒間目を閉じさせて一人ひとりにその場所の景観を予想させた後、本物の景観を写真やグーグルアースなどを用いて提示するのです。その瞬間、子どもたちから「やったー!」「えー!」などといった歓声がきつとあがりますよ。

5. インターネットや国語辞典で調べる技能を習得・活用させていくには

小河内ダムの建設のためにダムの底に沈んだ村があったという事実は、東京都水道局のパンフレットにほんの少し載っているだけです。そこで、インターネットで調べたり、こちらが調べたものを資料として提示したりする必要があります。

インターネットで調べるためには、パソコンでローマ字入力をする必要があるので、国語のローマ字学習とキーボード入力を併せて学習していくようにします。一覧表を常に手もとに置きながら、自分の名前などを使って入力の練習をします。

さて、いよいよ検索です。ポイントは、どんな言葉をどんな順序で入力していくかということです。自分の調べたい情報を早く手軽に入手するためには大切な技能です。小河内ダムとそのダム建設のために村を立ち退いた人たちについて調べたいのであれば、「小河内ダム歴史」と入力すると、小河内村の歴史についての情報が比較的容易に収集できます。このとき、a:できる限り短い言葉で入力すること、b:二つの言葉の間にスペースを入れることの2点を必ず伝えるようにします。子どもたちはこのような方法を使って、

建設のために移転を余儀なくされた世帯は総数945世帯に及び、その大多数は旧小河内村の村民だった。昭和13年、ようやく小河内村との補償の合意がなされたが、小河内村長小澤市平氏は、『湖底のふるさと小河内村報告書』（昭和13年）のなかで、「千數百年の歴史の地先祖累代の郷土、一朝にして湖底に影も見ざるに至る。實に斷腸の思ひがある。けれども此の斷腸の思ひも、既に、東京市發展のため其の犠牲となることに覺悟したのである」と思いを述べている。

(出典：小河内ダム「ダム便覧」日本ダム協会HP)

という大変貴重な情報を入手することができました。

「世帯」「補償」「合意」「犠牲」などといった難解な言葉も、国語辞典や百科事典（ポプラ社「ポプラディア」等）などで調べ、問題を追究するための大事な資料の一つとして、みんなで活用していくことになりました。

ちなみに、子どもたち一人ひとりが、どの教科の授業でもすぐに活用できるよう、教室に「マイ国語辞典」を常置するようになっています。「マイ国語辞典」だと、それぞれの辞典によって記述が若干異なることがよくあります。だからこそ、難解な言葉と出会ったとき、複

数の子どもに調べた言葉の意味を発表してもらいます。どの意味が最も適切かについて考える必然性が生まれ、資料の見方もより深いものになるからです。また、必要に応じて図書室に置いてある百科事典も活用させたいところです。

ここ最近、子どもたちはすぐにインターネットを使って、何でも調べようとする傾向が見られます。まずは身近な教科書、資料集、国語辞典などといった図書資料を使って調べてみるよう、日頃から助言しています。内容によっては、インターネットで検索するよりも早く確実に調べられるし、インターネットで調べる内容も明確になるからです。それぞれの「もの」の長所・短所を理解し、場面によって選択できるようにしていきたいものです。また、図書室を利用する際にも、

『どんな本ならそのことが載っていると思う？』

『その本はどのコーナーにあると思う？』

などと学校司書が問いかけ、子どもたちが図書資料を自分で見つけ、選択していく力を育ていけるよう支援しています。

6. 教師自身が調べることを楽しむ「学びスト」になることで

「小河内村の子どもたちはダム建設をどう思ったのか？」という学習問題を追究していくにあたって、教師が提示した資料もあります。

沈み行く小河内村 古屋通枝（5年生）

私はこの小河内村が水底にしずむのかと思うと、かなしくてたまりません。今まで仲よくあそんでいたともだちとも、とうとうわかれの日が近づいてきました。もう九月十日になってから私の級でも四人いなくなりました。この小河内のきれいな山や多摩川を二度と見ることはできません。お友だちとわかれて今までしらなかった町村にいて、その学校の生徒と友だちになって勉強や運動をやるのです。

貯水池になって移転していったこの学校へいってもまけないようにやるつもりです。

もうこの村にいて山へいったり川へ水あそびに行くこともできません。私が庭へ植えておいた木や草花も、私が毎日通って勉強した学校もみんな水の底にしずんでしまうのですから、こんなかなしいことはありません。東京市に土地を売ってしまっただけの所にいけばこんないい空気の所はなかなかないかもしれません。

それでも私たちがここを去って水をためて大ぜいの人のためになるのだからいいのです。

（出典：『おごうち 奥多摩町立小河内小学校創立百周年記念誌』）

教師が提示する資料には、必ずこのように出典を明記するようにしています。すると、子どもたちもまねをして、自分の調べてきた情報の出所である出典を明記していくようになります。

ところで、この提示した資料（旧小河内小学校児童の作文）の入手経緯ですが、小河内ダ

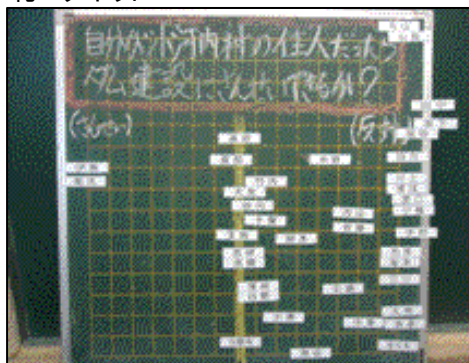
ムに取材中、昼食で立ち寄ったダムの高台にある食堂のご主人と話をしていたところ、偶然にもご主人がかつての小河内小学校の児童で、しかも、この作文が掲載されている創立百周年記念誌を持っているということがわかりました。恐る恐るこちらの事情をお話しすると、なんとこの貴重な記念誌を貸していただけることになったのです。

「求める心」が出会いを生むものです。「調べることって本当に楽しい！」とつくづく思った瞬間でした。同時に、子どもたちに調べる技能を身につけさせるだけでなく、やはり、この「調べることの楽しさ」を味あわせてやりたいと強く思います。そのためには、私たち教師自身が、調べることを楽しむ「学びスト」でなければならないと思います。

さらに、このとき、ご主人から「ダムサイトで売店を営む女性のかたが、建設当時、小河内小学校5年生だった」ということを聞かされました。その直後、ダムサイトの売店を一軒一軒訪ね、ついにお会いすることができました。

【資料7】ダム建設の賛否に関する名札マグネット

さて、授業では、子ども一人ひとりが、先ほどの資料をはじめ、みんなで収集した資料について自分が気になるところにマーカーで線を引き、互いにその理由を交流し合うことを通して、「自分が小河内村の住人だったらダム建設に賛成できるか？」という学習問題が成立しました。そして、名札マグネットをボードに貼りながら問題について話し合いを進めていきました（【資料7】）。



その最中に、図書館で調べてきた子から「ダムが建設されたのは、村人全世帯のはんこが押されたため」という事実が提示されました。そこで、「なぜ、小河内村の住人は全員賛成に回ったのか？」という学習問題が成立し、この問題を追究していくこととなりました。

この問題に対して、子どもたちは息の長い追究ぶりを見せました。2時間話し合いが続いた後、頃合いを見はからって、移転した当時小学校5年生だったおばあさんのインタビューを提示しました（【資料8】）

【資料8】

移転するときは、親しい友だちとの別れや自分のふるさとがダムの底にしずむことに対するさびしさ、悲しさ、そしてくやしさが胸がいっぱいになりました。

—くやしさですか？

なんでこんなことにならなきゃいけないのと思いました。小河内村しかなかったんでしょけど。

もちろん、父からはもうすでに決まったことだと聞かされましたし、東京都の水不足の問題を解消するんだから、大ぜいの人役に立つんだからということは自分に何度も言い聞かせました。もちろんほしょう金も出て、移転したわけですが、



なれないくらしは不安でいっぱいでしたね。何度も言い聞かせて、なっとくしようと思
ったんですけど。世の中の人のためになっているってことはわかるんですけど…。

—そうですよね。村がしずむってというのは…。

ダムができて水が入ってきても、満水になるまで2年かかるんです。だから、高台に
移転した後も、こわした家の近くの畑にじゃがいもをとりに行っていました。そんなと
き、昨日まではあった畑が水にひたってなくなっているのを見たとき、なみだがあふれ
てきました。ああ、これがしずむってことなんだって。

—移転した後の今のお気持ちは？

もう50年以上前のことですが、湖の底のふるさとのはことはわすれられません。けれど、
くよくよしてもいられません。人さまのためになったのだから、どうどうと生きていき
たいと思います。そして、小河内に住んでいた仲間と年に一回会ったり、小河内の味を
伝えていったりしていきたいと思います。とにかく小河内のことを、わすれないでほし
いと思うんです。

子どもたちは、

「今の自分たちが生きているのは、小河内ダムのおかげだね。だって、僕たちのおじいちゃ
ん、おばあちゃんも、小河内ダムから送られてくる水があったから、生きていくことがで
きたんだと思う。」

「小河内村の人たちのこんな苦勞があったことは忘れてはいけない」

「だから、やっぱり水を大切にしないと。蛇口の向こう側にこんなすごいことがあったんだ
から…」

といった感想をもらしていました。

7. 調べる技能が発揮された場面を「見える化」し、「クラス全員の財産」に

子どもたち一人ひとりに「知識を獲得する技能」（調べる技能）を身につけさせるには、
「自分たちの問題」が成立し、一人ひとりが調べる必然性をもった中で、調べる技能を習得
させ、さらに活用の機会をうんと与え、授業の中で「子どもの手柄」としてきちんと取り上
げていくこと、これに尽きます。それをくり返していくことにより、子どもたちは調べる技
能を身につけていくだけでなく、調べることの楽しさを味わい、調べることを楽しむ「学び
スト」になっていくのだと思います。

このような子どもたちとともに作り上げていった授業と、それを支えた①から⑩の調
べる技能が発揮された場面を写真などで記録し、子どもたちに見える形で提示し、子どもた
ちどうして振り返らせるといった活動を、私は単元末に行っています。

例えば、「いったい何にこれだけの水を使うのだろう？」という学習問題を追究している
とき、用務員のかたにおたずねしている子どもたちの写真を提示すると、

「蛇口や便器の数を調べるのは大変だったけど、みんなで協力して調べたのが面白かったね」

「用務員のかたに出会ったときに、きちんとおたずねできたから“秘密の部屋（ポンプ室）”に入れてもらえたんだよね」

「事前にみんなでおたずねの練習をしたよね。お互いに用務員のかただけでなく、事務員のかたや調理員のかた、副校長先生の役にもなって！」

「M子が用務員のかたに都合を聞くだけでなく、今なんのためにこういう調査をしているのかをきちんと言えたからだと思う。M子の手柄だよね」

「これから僕もまねしたいと思った」

このように、調べる技能が発揮された場面について、子どもたちどうして振り返ることにより、その技能が、より確かなものとして子どもたち一人ひとりに身についていくのです。同時に、調べる技能が発揮された場面を、教室掲示や学級通信を通して、さらに「見える化」し、「クラス全員の財産」にしていきます。

私は、「第一単元」（本単元は4～6月実施）では、特にこの活動を大切に行います。調べる技能が発揮された場面を「見える化」し、「クラス全員の財産」にすることによって、「第一単元」で身につけた調べる技能を、次単元以降でも活用していこうとする意識が、子どもたち一人ひとりに生まれるからです。

今回のテーマは、「学習をまとめる場面でひと工夫」です。調べたことをまとめたり、そこから新たな問いを浮上させたりするための指導上のひと工夫について、考えていきたいと思っています。